只見短歌会　七月詠草

大塚栄一　指導

はにかみて声かけくれし隣家の少年いつしか声変りたり　古川　英子

剪定鋏握りたるまま大空にぽっかり浮ぶ昼の月見上ぐ　斎藤ちひろ

検診の結果を知らす封筒を開ける間際に深き息吐く　目黒　富子

配達のついでと言ひて妹の店の店員花持ちくれぬ　五十嵐英子

裏山に巣籠る青鷺の数増えて田の面荒せど捕獲もならず　渡部ゆき子

新聞受けに鈴入れありて朝ごとの優しき音色に心和みぬ　五十嵐夏美

膝病みし友は畑に腰掛けを置きたるままに手術受けたり　馬場　八智

口内炎のわれに女孫の買ひくれし薬飲まぬをまた咎めらる　皆川　恒子

新盆に遺品の整理も出来ぬ日々重ねて姑の一周忌近し　渡部ヨリ子

朝食後の薬飲みつつ曜日など夫と確かめ合ふこと多し　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　八月例会

目黒十一　指導

声聞けど姿は知らぬ赤しょうびん　一穂

眠る間も食う間も育つ梅雨の草　敦子

長梅雨や菅笠の紐新しく　礼

すずめばち退治闇夜の黒覆面　一灯

しばらくは目で追う部屋の梅雨の蝶　修一

夏鶯駅の向いは鎮守様　又壱歩

還暦の友を囲みて船料理　邦男

戦車のごと天道虫の集まれり　都

図書室にづかづか入る夏帽子　吉児

黒揚羽出入り自由に古校舎　リウコ

山襞に霧が流れる夏の朝　邦男

苔の花庭にお稲荷様祀り　都

折紙のコマは水色梅雨深む　吉児

町の名を川に託して盂蘭盆会　リウコ

風鈴の音立つまでに風生れず　隆堂

羅や場所を通して砂かぶり　隆堂

軒廂雨音細き涼しさよ　邦夫

少年の打球の伸びや雲の峰　邦夫

道を聞く赤き車のサングラス　笑羊

快適な暮しや山の風涼し　笑羊

釣堀や水の流れる家の中　康女

夕日さす脚立の下に梅雨きのこ　康女

梅雨晴れや少年の丈また伸びし　邦男

梅雨晴間傘ふりまわし子らの行く　リウコ

夕焼や明日の仕事残し置く　都

炎昼や百五の嫗葬儀終ゆ　都

横になり又起きている夏の夜　吉児

赤いクツ手ぬぐい首にトマトもぐ　吉児